

平成 22 年 1 月 12 日

鹿児島大学歯学部の特徴ある教育の紹介

離島歯科巡回診療同行実習

離島巡回歯科診療同行実習実施委員会

我が国の歯科医師数過剰に伴って厚生労働省による歯科医師数の削減の努力が進むなかで、医療僻へき地といわれる地区も相当数存在しているのが現状である。平成 16 年の調査で鹿児島県内の無歯科医師地区は 7 町村の 27 地区に及んでおり、なかでも離島では今後急速に改善される見通しはたっていない。そうした中で、鹿児島大学歯学部は、昭和 55 年の開院以来、約 30 年にわたる無歯科医師地区の鹿児島郡三島村、十島村、口永良部島の島民に対して、歯科保健に対する意識の向上や口腔健康の改善に大きく寄与してきている。開始当初は、年間活動日数が約 25 日程度であったが、現在では年間 2 か月程度、各地区を平均 2 回訪れて、歯科診療科活動や歯科保健指導を行い、乳幼児・学童の虫歯の大幅な減少を遂げている。

平成 19 年鹿児島大学歯学部では、鹿児島県下の離島やへき地をモデルとして、地域社会や国際的な歯科医療へき地で求められる歯科医療や口腔保健について学ぶ「離島へき地歯科医療学」が立ち上げられた。本講義は、歯科医師数の過多や都会偏在によって生じる都市部における歯科医師過剰、一方、地方での医師、歯科医師の不足などの社会的問題を顧みて、国内外における離島へき地医療に貢献できる医療人の育成を目指すものであり、離島へき地包括的医療に関する高度の知識と幅広い支援方法を習得し、医療人としての質的向上および離島へき地医療に関わる人材の増加を目的としている。また、昨年から学部学生が巡回診療に同行する臨床実習も開始された。そこで、平成 21 年度歯科巡回診療同行実習に同行した教員ならびに参加した学生の感想を通じて、鹿児島大学歯学部の特色ある教育を紹介したい。

【同行教員の報告】

平成 21 年度歯科巡回診療同行実習同行報告

咬合機能補綴学分野 田中卓男

1. 巡回診療同行実習地・施設：鹿児島県鹿児島郡十島村諏訪瀬島公民館
2. 実習期間：平成 21 年 4 月 17 日, 18 日, 19 日
3. 同行実習班
 - 1) 参加学生：川井田奈央, 加藤ゆい, 勝村早恵 (いずれも 6 年次生)
 - 2) 学生同行教官：田中卓男 (咬合機能補綴学分野)
4. 巡回診療班
 - 1) 早乙女さき子, 小山徹 (鹿児島大学病院歯科)
 - 2) 早瀬健司, 藤崎郁恵, 北山のぞみ (鹿児島県歯科医師会)

4月17日（金）21:30に歯学部附属病院前に学生2名と田中が集合して、鹿児島本港区南埠頭へ出発。22:00にフェリー「としま」ターミナルに到着。他の参加学生1名はターミナルにて集合した。

23:00に巡回診療班メンバーがターミナルへ到着。診療班メンバーに学生メンバーを紹介し、早渕氏の指示で往復乗船券を購入した。往路は2等寝台席、復路は2等一般席とした。歯科医師会口腔保健センターの前川歯科医師の見送りを受ける。

23:30に巡回診療班とともにフェリー十島に乗船。荷物を各人の寝台席に収納後、船内食堂にてミーティングを行った。学生は諏訪瀬島における診療所の開設手順や予約患者の治療予定などについて説明を受けた。23:50出港。0:00就寝。

4月18日（土）9:20に諏訪瀬島港到着。学生、診療班は下船。早渕氏は巡回診療バスを運転して下船。診療班はそのバスにて診療所を開設する公民館へ直行した。学生と同行教官は送迎車にて民宿御岳（おたけ）へ行き投宿した後、直ちに診療衣に着替えて公民館へ向かった。公民館にて、診療所開設作業に参加。その内容は、公民館の清掃、診療器材のパッケージからの取出し、組立て、配置、患者受付の設置など。今回は女子学生が参加のため、診療バスの設置作業には参加せず。診療所開設の作業終了後、学生と同行教官は民宿に戻り昼食を取った。

11:00より診療開始。見学および介助による臨床実習を行った。また、受付事務についても早渕氏より指導を受けた。診療内容については別紙を参照のこと。診療終了は17:00。その後、診療室の清掃、整頓、機械類の整備を行い、翌日の診療が行えるようにした。本日の診療見学の症例は別紙の通りである。

その晩は、19時頃より、夕食を兼ねた診療班と学生、同行教官の懇親会が民宿浜原荘にて開催された。民宿の主人、従業員も参加して、島の医療事情や住民に関する情報などを得るとともに、今後の巡回診療や同行実習にとって有益な意見交換を行うことができた。22時過ぎに懇親会を終了した。

4月19日（日）は朝7時起床。朝食後は診療開始の9:00までを自由時間とし、学生は島内見物に出かけた。9:00から診療が開始され、学生は見学、介助のみならず、診療教員の指示の元で、患者さんの了解を得て、除石や刷掃指導の治療も行った。フェリー「としま」に乗船するために、10:00にて実習を終了した。学生と同行教官は保健婦の伊東氏に諏訪瀬港まで運んでもらい、10:35分出港のフェリーとしまに乗船して帰路についた。鹿児島港帰着20:00。ターミナル前で学生1名が解散。残る2名と教官は桜ヶ丘の歯学部附属病院前にて解散した。なお、診療班は14:00まで諏訪瀬島で診療を続けた後、村有行政連絡船七島Ⅱにて平島へ移動して診療活動を継続中であり、明日（4月22日）のフェリーで鹿児島へ帰着した。



図 フェリー「としま丸」



公民館での診療風景

別紙 1. 4. 18 歯科巡回診療同行実習（諏訪瀬島）見学症例リスト

	治療	その他	サ ホ ラ イ ド	フ ッ 素 塗 布	抜 歯	充 填	普 通 処 置	根 治	シ ー ラ ン ト	基 本 歯 衛	X レ イ	歯 石 除 去	義 歯 調 整	投 薬	他							
			人	歯	人	人	人	歯	人	歯	人	歯	人	人	枚	人	人	人	人			
1		1			1																	
2		1			1																	
3		1			1																	
4		1			1																	
5		1			1																	
6		1			1																	
7	1																	1				
8	1											1										
9		1																				
10	1							1	2						1							
11		1																				
12	1												1									
13	1																	1				
14	1							1	1									1				
15	1											1							1			
16	1									1	1				1			1				
17	1							1	2													
計	9	8	0	0	6	0	0	2	3	1	2	1	1	0	0	1	1	3	1	4	1	0

【学生体験談】

離島巡回診療を体験して（諏訪瀬之島）

加藤 ゆい

今回、離島巡回診療に参加させていただいて一番印象的だったのは、島の方々の生活が、思った以上に鹿児島(市内)と密接な関係にあることでした。物資の面での繋がりはもちろんですが、島の方は鹿児島のことにとっても詳しく、会話の中でも「鹿児島に行く」という言葉がしばしば聞かれ、私たちが島に感じる距離感と、島の方々が鹿児島に感じる距離感は随分違うと感じました。そして、実際に島に行き、島の方々と接することで、私自身も島をとて近く感じることができました。

また巡回診療においては、参加するのは限られた人数であることから、一人が何役もこなしたり、専門外の治療を行う必要も出てくるのではないかと考えていましたが、実際はしつかりと役割分担がなされ、体制が整っていることに驚きました。特に県歯科医師会から来られているスタッフの方々の力は大きく、歯科医師は歯科治療にほぼ専念できていると感じました。歯科治療についても、患者さんの希望にも依るものの、限られた時間で無理に治療を完了させるのではなく、可能な範囲での治療や応急処置に留め、鹿児島での治療を勧める形をとっており、患者さんもそれを十分理解されているようでした。

また島では居住範囲が狭いこともあり、コミュニティーが小さく、互いの関わり合いが濃い素晴らしい環境である一方、医療提供側は、プライバシーの確保など特に配慮が必要だと感じました。

今回、離島巡回診療に参加させていただき、実際体験することで初めて分かることがいくつもあり、大変勉強になりました。島は鹿児島の一部であるという実感とともに、医療者としての責任も感じることができました。また早朝から、筍取りに連れて行っていただいたり、灰雨に降られたり、素敵な体験も沢山させていただくことができました。最後になりましたが、このような貴重な経験を与えていただいたこと、お世話になった方々とそのご好意に心から感謝いたします。本当にありがとうございました。

離島診療に同行して（諏訪瀬之島）

川井田 奈央

今回同行させてもらった十島村は、鹿児島出身の私にも未知の地域でした。もともと、種子島や屋久島にすら行ったことがなかったので、離島そのものが未知の世界だったということもありますが、フェリーとしまでどんどん南下していき、うっすらと島が見えてきたときはなかなか感慨深いものがありました。

まず、島に滞在した期間が短かすぎたのか、生活面における不便は全く感じられませんでした。逆に、帰りの船での10時間にも及ぶ船酔いが待っていると思うと、もっと島に居残り

たいような気すらしていました。諏訪瀬島では、民家がある集落はある程度一つにまとまっており、そこには自動販売機もあったので、特段不便を感じなかったのかもしれませんが。

そしてもうひとつ感じたのが、歯科医師に対して島の人々が心を開いていたということでした。事前の説明の際には、島の人にはなかなか警戒心が強いと聞いていたのですが、そんな風には全く見えませんでした。その理由が、何度もこの島を訪れたことがある先生が相手だったからなのか、歯の治療となると年に2回のこのチャンスしかないからなのかは定かではありませんでしたが…。また、診療の見学を通して知りえたことも多くありました。普段の大学病院や一般開業医での診療では、MIが基本であり、良いことであるとされています。しかしそれが離島に住んでいる患者さんになると、MIにのっとなって接着性ブリッジなどにしてしまうと、人によっては普通のブリッジより外れやすかったり、患者さんの予後に余計な心配を付け加えてしまうことにも繋がるとは、実際に離島で患者さんをみせていただけて初めて知った事実でした。つまり、診療の本質ではありますが、どれだけ患者さんの立場に立って治療の選択肢を考え、提案し、その患者さんにとってのメリットデメリットまでもを説明できるかというところがやはり大事であるということをも身をもって体験できました。

今回の離島診療同行実習では、今後、過疎地や在宅での診療に携わる際にも役に立てられる貴重な経験をさせてもらうことができました。島の住民の方々や、色々とお膳立てして下さった歯科医師会の早瀬さんに感謝したいです。

諏訪之瀬島での離島診療実習（諏訪瀬之島）

勝村 早恵

鹿児島県は、28の有人離島を有し、離島人口は約19万人と全国で最も多い県です。離島人口は年々減少傾向にあります。離島診療は今後も更なる発展をさせていくべき重要な分野であると思います。

今回、離島診療実習をさせて頂いたのは鹿児島市からフェリーで約10時間の距離にある、活火山「御岳」が印象的な十島村の諏訪之瀬島です。十島村の中で面積は2番目に大きく、人口は約50人と2番目に少ないのですが、美しい自然を有し、多くの生物と人々とが共存する生命力あふれる島でした。

諏訪瀬之島では歯科巡回診療車「こじか号」と公民館で診療を行いました。こじか号の内部は長年の経験に培われた工夫が随所に施されており、限られたスペースの中でX線撮影や器具の洗浄、滅菌までもが行えるような設備が整っていました。公民館では机や手動のチェア、ポータブルの切削器具などの準備を診療スタッフ全員で行い、島の看護師さんも準備や事務的な仕事を手伝って下さいました。患者さんの予約は一時間に約2人で、処置内容によりこじか号と公民館を使い分けていました。診療内容は、義歯調整などの補綴的処置から、齲蝕治療、学校健診と様々でしたが、継続的な治療が行えないため、通常の処置と比べると

制限があるようでした。診療後は、診療スタッフの皆さんや宿の方とバーベキューで地元の食材を頂きました。

翌朝（19日）は出発前に島内観光をしましたが、野生のトカラ山羊と遭遇したり、地元の方の暖かさにふれたり、短時間でしたがとても島を満喫することが出来ました。

今回の実習では離島での暮らしや医療の現状について少し学ばせて頂きましたが、離島診療の特徴について気付いた事がいくつかありました。まずは、治療を限られた時間内で確実にやり、処置内容や材料も限られるため、高度な技術、知識、経験が必要であるということ。患者さんにとって受動的診療となるため、積極的に集まりにくいことがある。全身疾患を有する患者さんのコントロールが不十分となりやすいこと。診療スタッフのメンバが一固定されていないため患者さんと術者の信頼関係を築きにくいことなどです。離島で生活する人々に歯科診療は必要とされており、離島診療の分野において今後の更なる発展により患者さんにとってより診療を受けやすい環境が整えられていくことを望みます。

最後になりましたが、今回お世話になった診療スタッフや諏訪之瀬島の方々にお礼を申し上げます。

離島巡回診療同行実習（口永良部島）に行つて

岡田 理沙

2009. 6. 17 から 6. 20 まで、口永良部島にて行われた離島巡回診療に臨床実習の一環として同行させていただくことができました。数年前から臨床実習中の6年生が離島診療に同行できるようになり、低学年のころから自分が6年生になった時には是非離島診療に行つてみたいと思い、今回希望を出したところ同行させていただけることとなりました。

4月の初めに離島診療に参加する14名の6年生を対象に簡単な説明会が開かれた時は、まだ全然離島に行くという実感はありませんでした。ただ、自分が行くことになった口永良部島が他の離島に比べるとIターンの方が多く、少し違った雰囲気を持っている島だということを知り、島の方々がどのような暮らしをしているのだろうと思いました。あつという間に6月に入り、そろそろ支度を始めようと思つていたものの実際に荷造りに取りかかったのは前日でした。私たちの班は学生の同行の中で一番遅い日程だったので、今まで離島に行った学生から、島での必需品は何かなど、情報を収集して準備に取り掛かれました。

屋久島の北北西方向にある口永良部島には、鹿児島市内からだと屋久島フェリーに乗つてそこからフェリー太陽丸に乗り継いで行きま



した。フェリーの甲板からはたくさんのトビウオが見えて、離島へ向かっているんだと実感が湧きました。島に到着して診療準備を手伝い、温泉に連れて行ってもらって一日目は終了しました。二日目、三日目は診療日でしたが、学生は問診をとったり、小学生のフッ素塗布やブラッシング指導を行いました。診療所に常駐されている保健婦さんのおかげで、高齢者の方の服用中の薬剤などについて情報がいただけたので比較的スムーズに問診を取ることができました。高齢者の方の多くは義歯調整でしたが、大学病院だったらすぐに新義歯作製になるような状態でも、ラインのみしか行えない現実を見てもどかしく思うとともに、診療機材や人材、時間が限られている中で、ベストな治療を考えて実行するということの難しさを感じました。ただ、口永良部島の方々の多くが屋久島や鹿児島市内に定期的に病院を受診されているということで、今回は応急処置に留めておいて、その後のフォローを屋久島や市内の歯科医院で行ってもらうことができるということでした。午後になると学校が終わって、小学生たちがたくさん来ました。小学生たちは、半年に一度の離島巡回診療時に毎回受診しているらしく、口腔内の状態は良好なように思えました。カリエス治療の必要な子はごくわずかです。ほとんどがブラッシング指導やフッ素塗布でした。鹿児島市内に住んでいる子どもたちは、歯が痛くなったり、学校の検診で虫歯が見つからないと歯科医を受診しないのに対して、島の子供たちは親御さんの意識も高く、半年に一度の機会にきちんと定期健診を受けているので、常駐の歯科医師がいなくても口腔衛生状態が高く保たれるのだろうと思いました。また、二日間の診療日中、30代、40代の方は数えるほどしかいらっしゃらず、働き盛りの年代の方は離島診療が来ていても受診することができないことも分かりました。今、働き盛りの方々が歯周病やカリエスを治療することなく過ごしていくことで、将来的に早い時期に歯を喪失して、義歯を作らなければならないようになってしまうのだと思いました。せっかくの受診の機会なので、一人でも多くの方が来てくれればと思いますが、離島巡回診療は島の方にとっては非日常であって、そこで生計を立てている人たちの一部にはもしかしたらプラスなものではないのかも知れないと思いました。

3泊4日の同行実習に参加して、今実習している大学病院が特殊な施設であることに気付かされ、もっと色々なものを見て、視野の広い歯科医師にならなくてはいけないと思いました。そして、何か一つの分野に特化することも大切だと思う一方で、卒業試験や国家試験が終わっても、いま一生懸命勉強していることをできるだけ忘れずに、オールマイティーな歯科医師になればいいなと思いました。これからさらに離島巡回診療が充実したものになって、そのノウハウが鹿児島だけにとどまらず広まっていけばいいと思いました。

離島実習を終えて（三島村－黒島）

鷲本 剛

私は、数多くの鹿児島県の離島の中の三島村－黒島に、鹿児島大学離島巡回診療同行実習

として、鹿児島県歯科医師会口腔保健センターの歯科医 1 名と、衛生士 2 名、鹿児島大学から義歯補綴科の西准教授と口腔保健科の北田先生に学生 2 人で同行させていただきました。私は、鹿児島県に来て離島に行くのは初めてで人口 200 人の島とは一体どのような所なのかと期待と不安が少し混じった状態で船に乗り込みました。そして、船は竹島―硫黄島を経て黒島に着きました。港には大勢の人がいて、想像とは違い少し驚きました。しかし、それは物資、荷物などを求めて船が来るたびに島の人たちが港に集まってくると聞き、驚きが納得に変わりました。

そして、到着するとすぐに診療の準備に取り掛かったのですが、私たち学生以外の人たちの準備の要領の良さやスピードには全くついていけませんでした。つかの間もなく、検診が始まり最初は本当に何を手伝って、どのように役立てばよいかわからず時間だけが過ぎていくような感覚でした。しかし、同行された先生やスタッフさんが本当に優しく教えていただいで、自ら行動を徐々に起こしていけるようになりました。

私が一番印象に残っていることは、診療になると先生方は普段異なる場所で働いているにもかかわらず、すぐに連携をとり、小さな一つのチームを構成したかのように役割分担・連携ができていて驚きと言うより不思議ささえ覚える光景でした。



最後に、私は本当に離島巡回診療に行けてよかったと思います。それには、応急処置や患者さんへの普段とは異なった説明の難しさなどが挙げられます。それに加え、島の現状に一目見ることと触れることができ、同行してくださった先生やスタッフさんたちと蜜にたくさん話を聞くことができ、普段の臨床実習ではできない数少ない貴重な経験をできたからだと思います。

離島同行実習を終えて（黒島）

延谷 佳亮

私は、鹿児島大学離島巡回診療同行実習という機会を経て、屋久島の北西にある三島村の一つ、黒島に行った。鹿児島港から、船にのりこじか号とともに 5 時間かけて、フェリーみしまで、黒島に向かった。黒島に向かったメンバーは、鹿児島県歯科医師会口腔保健センターの歯科医 1 名と、衛生士 2 名、鹿児島大学から補綴科の西准教授と予防科の北田先生と学生 2 人で向かった。島に向かう道中は、黒島の風土や風習のすばらしさを聞いて期待に、胸をおどらせた。

私自身、鹿児島県に来てから、屋久島、奄美大島、種子島といった、人が多くすんでいる島に

は何度かいったことがあった。その島々は、飲食店街や、スーパーがあり、島の中に町があった。しかし、私たちが向かう黒島は、自動販売機ですら島内に2台しかないと聞き、どんなところだろうとどきどきしていた。島に到着すると、すぐに、島内のコミュニティーセンターに案内された。そこで鹿児島から持ってきた、道具の準備をおこなっていきましたが、始めてきた私たち学生は、何をどこにもって行ったらいいか、全くわからず、てんてこまいだった。でもこれが離島診療の醍醐味の一つだと感じた。一から自分たちが診療できる環境をつくりあげる。なかなかないことである。ポータブルの歯科道具も普段の外来では見られないものでとても新鮮なものであった。

歯科診療には2台のチェアを用い、1台はコミュニティー内にあるチェア、もう1台はこじか号でおこなった。この2台で、2日間診療をおこなうこととなった。こじか号では、

歯科に必要な道具がすべてそろっていた。齲蝕治療、エンド、歯周治療、補綴治療が行えるだけでなく、抜歯、flapなど小手術も行える道具はそろっていた。オートクレープまで完備されていた。また車椅子の患者さんにも対応できるようになっており、歯科業界での「スーパーカー」といっていい車であった。診療をおこなう準備が整ったら、さっそく歯科検診をおこなった。歯科検診は、小児から中学3年生まで15人程度を1チェアにあたり診療した。



私は北田先生のアシストについていたが、離島の子供や小学生は、口腔内の状態は、私が想像していたよりも良かった。これは、一つは毎年、鹿児島大学から歯科医師がきていること。もう一つは、黒島が本土から船で5時間という環境にあり、交通条件は、十島村よりも良いということが考えられた。コミュニティー内のチェアでは、バキュームや水まわりがなかったため、検診をするにも工夫する必要がある。例えば、検診時、口腔内の様子が見やすいように口の中を乾かした状態にしておきたい。そこで角綿を用いて、唾液をふき取り、できるだけすばやく処置をおこなうという通常の診察ではおこなわない方法をおこなった。1日目は検診のみを行い、具体的な診療は次の日となった。診療所の近くの民宿で一泊したが、島内の郷土料理はおいしく、お酒を交わしながら先生方と話せたのは貴重な体験となった。2日目は診療をおこなった。村の行事と天候が悪かったこともあり、患者さんの数は多くはなかったが、義歯が痛いという人から、齲蝕、歯周病の患者さんは多様であった。

診療をおこなっていく上で一番痛感したのは、治療が応急処置になってしまうことであった。義歯をみても、どうみても新しく作り変えた方がいいとかんがえられるものであっても、離島診療では一回の診療で治療を終えざるをえない。以前の義歯をリライニングして、調整し、患者さんの痛みをとる方法しかなかった。それは歯周治療においても同じことが言えた。

その場で歯石をスケーリングによってとることはできても、ブラッシングの仕方を説明することが出来ても、その後の経過を見ることが出来ない。数ヵ月後にはまた同じように歯石がたまり歯周病が進行して、歯が脱落している。ここに離島診療の難しさがあったように思える。歯科医師としては、患者さんに1番いいもの「best」のものを提供したいのに現実には、その場の痛みを取る、患者の主訴のみを改善する「better」のものしか提供できない歯がゆさがあった。

私にとって離島同行実習は、非常に貴重な体験となった。離島の現状をこれから歯科医師になる人間として知ることが出来たこと、道具のない状況の中で如何に最善を尽くすことが出来るか、また島の人達の温かさ、優しさに触れることができたこと、これは離島に行ったことで初めて得られた経験だと思う。この経験を肥やしにしてこれから立派な歯科医師になりたいと思う。

離島実習を終えて（中之島）

矢田 光絵

鹿児島には離島がたくさんあり、離島への実習に行ける機会があつて本当に良かったと思います。私は、こじか号で成人の方の治療を主に見学しました。大学とは違い、プラークコントロールができていない患者さんが多いのですが、循環診療の際にプラークコントロールの大切さを治療時に説明することは患者さんにとっていい刺激になっていました。中之島の診療所の看護師さんからも普段からブラッシング指導の大切さを広めることができればもっと巡回診療がよくなると思いました。

また、離島診療では、根管治療など治療期間が必要な治療ができないので、応急処置だけになってしまい、後の処置は、鹿児島市内に行つての治療になるので、離島診療の限界も感じました。しかし、義歯の調整、カリエス治療、子供の歯科検診などは、こじか号のユニットがあり、歯科用器具、材料が充実しているので、診療所と変わらない治療もできます。こじか号でできる範囲の治療をし、患者さんが満足して笑顔で帰られる様子を見学できて心に残る経験になりました。



離島診療を終えて

久保田 美穂

私達は6月初旬に、十島村にある中之島への離島診療に同行させて頂きました。離島では

どのような診療が行われているかや、離島の人々に暮らしなどについては講義である程度知っていましたが、実際に離島診療に参加したことは大変貴重な体験となりました。

ポータブルユニットについて写真で知っていましたが、配線の複雑さや使用時の音の大きさに驚きました。また、すぐに注水用の水がなくなることや吸引した液体がすぐに満水になること、操作性など不自由さを感じました。また、診療台での診療なので、体勢が前かがみになり、先生方も大変そうでした。しかし、何より離島診療の難しさを感じたのは染根管治療や、抜歯をするにしても経過が見られないなど、時間による治療内容の制限があるということでした。どのような治療をすることが患者にとっていいのかを考えるとともに、大学病院での治療の環境の良さを改めて実感しました。

この実習を通じて学んだことを生かしてこれからは生かして生きたいと思います。改めて、このような機会を与えて頂いた先生方、歯科医師会の方、本当にありがとうございました。

